

マルケス:ダンソン 第2番 (約10分)

Arturo Márquez: *Danzón No. 2*

マルケス:トランペットとオーケストラのための

「秋のコンチェルト」*共同委嘱作品(日本初演) (約19分)★

Arturo Márquez: *Concierto de Otoño para Trompeta y Orquesta* *Co-Commission (Japan Premiere)

第1楽章 光のソング
Son de Luz 第2楽章 フロリポンディオのバラード
Balada de Floripondios 第3楽章 フローレスのコンガ
Conga de Flores

— 休憩 (20分) — Intermission

コープランド:バレエ組曲「ロデオ」より (約8分)

Aaron Copland: *Rodeo (Four Dance Episodes)*

Ⅲ .土曜の夜のワルツ
Saturday Night Waltz Ⅳ .ホー・ダウン
Hoe Down

コープランド:バレエ音楽「ビリー・ザ・キッド」組曲 (約21分)

Aaron Copland: *Billy the Kid: Suite*

I .序奏:果てしない大草原
Introduction: The Open Prairie II .開拓者の街の通り
Street in a Frontier Town

Ⅲ .メキシコの踊りとフィナーレ
Mexican Dance and Finale Ⅳ .大平原の夜:夜のカードゲーム
Prairie Night: Card Game at Night

V .拳銃の戦い
Gun Battle Ⅵ .祝賀会:ビリー逮捕の後
Celebration: After Billy's Capture

VII .ビリーの死
Billy's Death VIII .再び果てしない大草原
The Open Prairie Again

指揮: 井上 道義 *Michiyoshi Inoue, Conductor*トランペット: パーチョ・フローレス *Pacho Flores, Trumpet* (★演奏曲)管弦楽: 兵庫芸術文化センター管弦楽団 *Hyogo Performing Arts Center Orchestra*

2019 5/24(金)・25(土)・26(日) 3:00PM開演

兵庫県立芸術文化センター KOBELCO 大ホール

主催: 兵庫県、兵庫県立芸術文化センター

※演奏時間は目安となります。前後する可能性がありますので予めご了承ください。

助成:

文化庁文化芸術振興費補助金
(舞台芸術創造活動活性化事業)

独立行政法人 日本芸術文化振興会

これさえ
見れば
わかる!

今回の聴きどころ

アメリカ大陸の作曲家2人の登場

東条 碩夫(音楽評論)

ドイツ、フランスと進んで来たPAC定期の音楽の旅。今月の定期では、アメリカ大陸を訪れる。登場するのは、メキシコの現代作曲家アルトゥーロ・マルケスと、アメリカ合衆国の近代作曲家アーロン・コープランドだ。ともに彼らのお国柄をはっきりと出した音楽で、楽しいことこの上ない。

特に第1部で演奏されるマルケスの作品——トランペット協奏曲は、PACが他のオーケストラと共同で作曲を委嘱したもので、今回が日本初演となる。作品委嘱に一役買った超絶技巧の名奏者パーチョ・フローレスによる豪華華麗な演奏が聴きものである。

一方、コープランドの作品は「ロデオ」と「ビリー・ザ・キッド」。いかにも西部劇っぽいタイトルで、曲にも多かれ少なかれその雰囲気が顕れており、西部開拓史時代のアメリカを想像させることはたしかである。……ただし、いわゆる西部劇映画のサウンドトラックのような音楽を期待してはいけません。

必聴POINT

ライター
おすすめ!!

マルケス:ダンソン第2番

《闊達なラテン・アメリカの舞曲》

ネットのYouTubeに上がっている映像では、ドゥダメル指揮のシモン・ポリバル・ユース・オーケストラの若者たちが笑顔でノリまくって演奏している——そういう音楽。

マルケス:トランペットとオーケストラのための「秋のコンチェルト」

《名手フローレスの豪華華麗なソロが凄い》

トランペットの魅力を余すところなく発揮させた、血沸き肉躍るラテン・アメリカ・タイプの協奏曲。

コープランド:バレエ組曲「ロデオ」より「土曜の夜のワルツ」「ホー・ダウン」

《4曲からなる組曲から2曲を抜粋》

「ロデオ」とは、暴れ牛や奔馬を乗りこなす激しいスポーツのこと。音楽はまさにアメリカ合衆国の西部開拓時代を連想させる雰囲気。

コープランド:バレエ音楽「ビリー・ザ・キッド」組曲

《西部の大草原をイメージさせる音楽》

実在のアウトロー、ビリーの波乱に富んだ生涯のエピソードを描くバレエ。保安官たちとのピストルの打ち合いの描写が笑える。

PROGRAM NOTE

曲目解説 —
演奏をより深く楽しむために
東条 碩夫(音楽評論)



マルケス:ダンソン 第2番

初演:1994年 メキシコ市

大編成オーケストラが響かせるラテン・アメリカ系舞曲

メキシコの現代作曲家アルトゥーロ・マルケスの作品の中でも、これは最も広く親しまれている曲であろう。1994年にメキシコ国立自治大学の委嘱により作曲され、同大学のオーケストラにより初演された。吹奏楽の愛好者には絶対的な人気を誇る曲である。演奏時間は10分程度で、美しい哀愁と、熱狂的な躍動とが交錯、特に後半の盛り上がりが素晴らしい。

「ダンソン第2番」は、スペイン語をそのままに「ダンソン・ヌメロ・ドス」とも表記されることもある。ダンソンはキューバの舞曲の一つだが、メキシコのベラクルスなどにおけるフォルクローレとしても流布しており、マルケスはそのベラクルスのダンス会場を訪れた際にダンソンを聴き、インスピレーションを受けたという。

楽器編成

フルート2(ピッコロ持替)、オーボエ2、クラリネット2、バスーン2、ホルン4、トランペット2、トロンボーン2、バス・トロンボーン、チューバ、ティンパニ、大太鼓、サスペンド・シンバル、スネアドラム、クラベス、ギロ、トムトム3、バンゲー、ピアノ、弦楽5部

マルケス:トランペットとオーケストラのための「秋のコンチェルト」

※日本初演

初演:2018年9月7日 メキシコ市

PACも共同委嘱した協奏曲、ついに本邦初演

これは兵庫芸術文化センター管弦楽団、メキシコ国立交響楽団(2018年9月7日に世界初演を

行なった)、ツーソン交響楽団(米国アリゾナ州、2019年1月25日アメリカ初演)、オビエド・フィラルモニア(スペイン、2019年8月14日スペイン初演予定)の共同委嘱作品。2018年1月~6月に作曲された、演奏時間20分ほどの豪壮なコンチェルトである。

今日のトランペット奏者パーチョ・フローレスは、この曲がメキシコやキューバ、その他のスペイン系音楽の影響を受けていることを指摘している。なお、彼がマルケスに作曲を依頼したきっかけなどについては、P16~17の「アーティストインタビュー」をお読みいただきたい。彼は「マルケスの作品は子供のころから吹いていた、そしていつかはマルケスのつくったトランペット協奏曲を吹いてみたいと夢見ていた」とも語っている(ツーソン響のサイトより)。またフローレスはこの曲で、C管とD管のトランペットおよびフリーゲルホルンを含む4種の楽器を持ち替えて演奏する。

曲は3つの楽章—南国的な活力をダイナミックに漲らせた第1楽章「光のソナ」、物思いに沈む叙情的な管弦楽の上にトランペットが活気と哀愁とを織り交ぜて歌う第2楽章「フロリボンディオのバラード」、および躍動的な第3楽章「フローレスのコンガ」からなる。「ソナ」は民族舞曲、「フロリボンディオ」は花、「コンガ」は打楽器の一種だが本来はアフロ・キューバ起源のダンスの意味がある。

楽器編成

独奏トランペット、フルート2(ピッコロ持替)、オーボエ2、クラリネット2、バスーン、ホルン4、トランペット2、トロンボーン2、バス・トロンボーン、チューバ、ティンパニ、サスペンド・シンバル、スネアドラム、チューブラベル、シロフォン、コンガ、タンブリン、ギロ、マラカス、クラベス、弦楽5部

作曲家プロフィール アルトゥーロ・マルケス(1950-)

Arturo Márquez

メキシコ北西部のソノラ州アラモス生まれ。祖父はメキシコのフォーク・ミュージシャン、父はマリアッチ(メキシコの音楽を演奏する楽団)の演奏家。1970~75年にメキシコ音楽院でピアノと作曲理論を学んだ。メキシコの音楽のスタイルを巧みに取り入れた作曲家と評される。作品はバレエ曲や民族舞曲を含む大管弦楽曲、室内楽など多数。ちなみに「ダンソン」という題名を持つ曲は、1994年に書かれた3曲のあと、2017年までに9曲が発表されている。

コープランド:バレエ組曲「ロデオ」より “土曜の夜のワルツ” “ホー・ダウン”

バレエ初演:1942年10月16日 ニューヨーク
組曲初演:1943年5月26日 ポストン(3曲のみ)

「アメリカのバレエ曲」の本領

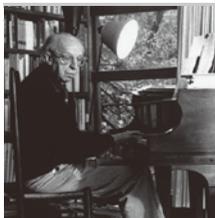
コープランドのバレエ音楽(未出版のものを除く)は、「ビリー・ザ・キッド」(1938年)、「ロデオ」(1942年)、「アパラチアの春」(1943~44年)、「ダンス・パネルス」(1959年)の4作を数えるが、このうち有名なものは、やはり最初の3曲である。これは、「ビリー・ザ・キッド」の好評に注目したモンテカルロ・ロシア・バレエ団の委嘱に応えたもので、バレエ初演はメトロポリタン・オペラで行なわれた。振付と主演は、当時の有名なバレリーナ、アグネス・デ・ミルで、初演時のカーテンコールは22回にも及んだという。ストーリーは、お転婆娘のヒロインが男勝りの大暴れをしたあげく、最後は女性らしくなって愛する青年と結ばれる—というミュージカルのなものである。

バレエの大成功に気をよくしたコープランドは、全曲の中から4曲を選んで演奏会用組曲とした。今日演奏されるのは、その第3曲と第4曲にあたる作品である。

なお「ホー・ダウン」にはいろいろな意味があるが、ここではアメリカ合衆国南部の牧童たちの踊り、とでも解釈すればよいだろう。アメリカのフォーク、カントリー、マウンテンなどのミュージックや、アイルランドやケルトのフィドル(ヴァイオリン)などの音楽など、幅広い起源を持つ音楽である。

楽器編成

フルート2、ピッコロ、オーボエ2、イングリッシュ・ホルン、クラリネット2、バス・クラリネット、バスーン2、ホルン4、トランペット3、トロンボーン2、バス・トロンボーン、ティンパニ、大太鼓、シロフォン、サスペンド・シンバル、スネアドラム、トライアングル、ウッドブロック、ハーブ、ピアノ、チェレスタ、弦楽5部



作曲家プロフィール アーロン・コープランド(1900-1990)

Aaron Copland

ニューヨークのブルックリンに生まれ、ニューヨーク州ノース・タリータウンで没した米国最大の作曲家の一人で、教育面にも大きな功績を残し、ピューリッツァー賞をはじめ数々の賞を受賞、米国の代表的な名誉職を数多く兼任した。米国の批評家ショーンバーグは、「彼はアメリカ音楽を……力強く、モダンで、きわめて個性的な音楽言語へと変貌させる突破口を切り開いた……ドイツの支配のくびきを外すことにも貢献した」と指摘している。(注)

(注:ショーンバーグ著「大作曲家の生涯」亀井旭他訳、共同通信社刊)

コープランド:バレエ音楽「ビリー・ザ・キッド」組曲

バレエ初演:1938年10月16日 シカゴ
組曲初演:1940年11月9日 ニューヨーク

無法者なのに人気のある主人公

ビリー・ザ・キッド(1859~1881)は、アメリカ西部開拓時代に実在した無法者で、ロバート・テイラー、オーディオ・マーフィ、ポール・ニューマンら多くの名優たちが主演した映画でも知られて人気があるが、それは一種の伝説として創り上げられた人物像によるものとも見られる。本名はウィリアム・ヘンリー・マッカーティ、のちにウィリアム・ボニーと呼ばれ、脱獄して逃亡中に、ニューメキシコ州で保安官パット・ギャレットに射殺された。当時のウォレス州知事は彼に恩赦を与えると称して司法取引が成立していたと伝えられるが、実際にはその後も認められず、2011年にはビル・リチャードソン知事が改めて「恩赦を認めず」と発表し、話題を呼んだ。死後130年経った時代にさえも話題となる人物なのである。

コープランドは、このビリーの物語に基づき、バレエ・キャラヴァンのプロデューサーであるカーンスタインの委嘱により1938年にバレエ音楽を作曲した。シカゴのシヴィック・オペラハウスでのバレエ初演は2台のピアノによる版で行なわれ、管弦楽版によるそれは1939年5月24日のニューヨーク初演の際と言われる。また組曲版の初演は、スタインバーグ指揮NBC交響楽団により行われた。

物語は、中心モチーフ「序奏—果てしない大草原」に始まり、西部開拓者たちが集う光景や、母親を射殺された12歳の少年ビリーが犯人を刺殺するエピソードなどを含む「開拓者の街の通り」「メキシコの踊りとフィナーレ」に続く。その後の出来事として、ビリーが仲間たちとカードを楽しむ場面(「大平原の夜—カードゲーム」)、保安官との銃撃戦(「拳銃の戦い」)が描かれ、「ビリー逮捕後の祝賀会」を経て「ビリーの死」へ続き、エピローグとしての「再び果てしない大草原」で結ばれる。

楽器編成

フルート2(ピッコロ持替)、ピッコロ、オーボエ2、クラリネット2、バスーン2、ホルン4、トランペット3、トロンボーン2、バス・トロンボーン、チューバ、ティンパニ、大太鼓、グロッケンシュピール、シンバル、スネアドラム、スレイベル、トライアングル、ウッドブロック、ギロ、鞭、ハーブ、ピアノ、弦楽5部